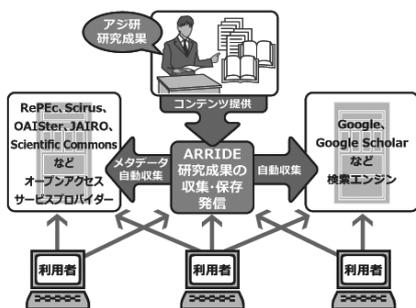


図1 ARRIDEコンテンツ発信のしくみ



機関リポジトリによる情報発信の可能性

—ARRIDEの歩み

坂井華奈子

「機関リポジトリは図書館員の夢を実現する」これは本誌昨年三月号掲載の千葉大学の竹内教授による巻頭エッセイのタイトルである。インターネットが出現するずっと以前から、世界中のあらゆる文献の内容や所在について明らかにし、検索可能な状態に整え、求める人に求めるときに提供できるようなしたいと願い努力してきた図書館員たち。研究機関が自らの研究成果へのフリーなアクセスを提供する機関リポジトリの登場は、その夢の実現に大きく貢献する可能性を持っている。

●機関リポジトリとは

出現からまだ日が浅いため、機関リポジトリ (Institutional Repository: IR) という単語は耳慣れないという方も多いかもしれない。これは前述の通り大学や研究機関がその研究成果である知的生産物(論文など)を二元的にデジタルな形態で保存し、ウェブ上で無料公開するシステム/サービスである。現在国内では一五五件、世界では一五六二件が公開されている(二〇一〇年一月時点。国内件数はJAIRO、世界はOpenDOARによる)。利用

する側に利益があることはもちろん、広く公開された成果物のショーケースとしての機能、機関の認知度向上、社会貢献の窓口としての役割も期待される。本誌二〇〇九年三月号においても「学術情報へのアクセス向上を目指して—機関リポジトリのいま」と題して特集しているので各国の事情など詳しくはそちらを参照されたい。

●IR-ARRIDEの特徴

アジア経済研究所(アジ研)のIRは、略称を「ARRIDE」(Academic Research Repository at the Institute of Developing Economiesの略。英語の古語で「満足させる、喜ばせる」という意味を持ち、アライドと発音する。)とし二〇〇六年八月に公開された(<https://ir.ide.go.jp/dspace/>)。大学以外の研究機関としては国内初、また日本のIRとしても比較的早い公開であったといえる。ARRIDEではOAI-PMHという世界共通の方式に合わせてメタデータ(論文名や著者などの情報)を記述しているため様々な外部のサービスと連携しやすいという利点がある。特定の分野に特化したサイトを選

択的に情報を流すこともでき、効率的な成果の普及を助けている。現在は主に八つの外部サイトに登録しメタデータを検索可能にしている(図1参照)。なお、経済学分野の文献情報等を提供するRePEc (Research Papers in Economics: <http://repec.org/>)への登録にあたってはテンプレートにあった形式へデータ変換を行うプログラムを追加している。また、グーグルのサイトマップ機能を活用し検索時に効果的にヒットするよう工夫を加えている。

前述の本誌IR特集号内の筑波大学佐藤翔氏らによる記事では、検索ロボットなどからの機械的なアクセスを除外し、人間が本文を閲覧した場合のみのログを抽出したうえで国別、参照元別などに分析し、ARRIDEの特徴を考察している。北海道大学、京都大学とアジ研とを比較すると、前者はいずれも国内からのアクセスが過半数を占めるのに対し、後者ではRePEcなどを経由した海外からのアクセスが七二%に上っており、ARRIDEの国際的な研究活動への貢献が窺われる。ただしこの分析は二〇〇八年三〜九月のデータを元にしているが、同年一〇月に国内のリポジトリ

横断検索サイトJAIROが試験公開されたことに関連し、ARRIDEへの訪問者数は約一・五倍に伸び、日本語論文のダウンロード数も増加した。こちらはロボットなどのアクセスを含む数ではあるが、国内利用の増加が示唆される。同氏らは昨年二月の国際会議DRFIC2009で「RePEc's impact on usage of working papers in institutional repositories」と題したアジ研と一橋大学のIRのログ分析を用いた発表を行っており、RePEcへの登録は英語の論文と海外からの利用者へ強い影響を及ぼし、検索エンジンで見つけられない論文の発見を助けていると述べている。これはその一例であるが、IRは外部との連携において様々な可能性を持っている。

●課題と展望

アジ研にはほかにAIDEという研究所出版物のデジタル・アーカイブスがある。ARRIDEとの相違点としては、一部有料の賛助会員向けサービスを含む点や、研究所の出版物のみが対象で外部の雑誌に掲載された論文は収録されないなどの点があげられる。しかし、当研究所発行の雑誌『アジア経済』を例にとると、ARRIDEには職員の執筆分しか登録されないが、AIDEではすべての記事が対象となるなど収録対象にはややずれがある。細かい違いはあるが、内容や作業的に重複する部分もあるのでその解決は課題であるといえよう。また、利用する側にとっては違いを意識しつつ二つのシステムを使い分けるのは煩わ

しいであろうし、二元的にすべてのアジ研の出版物および研究成果を検索できるようにすることが望ましい。このためにはシステムの統合か、メタデータを集約し、一カ所から検索・アクセスできるようにハーバスタの設置などの方法が考えられる。

近頃は「機関」だけでなく、地域のつながりで同じ県内の大学などが共同でリポジトリを運営したり、同じ分野の研究成果をまとめてみられるようなサブジェクト・リポジトリの構築も行われている。二〇一〇年一月にはサブジェクト・リポジトリに関する国際会議がロンドンで開催されるなど、動向が注目される。ARRIDE収録の英語論文はRePEcを通して経済学分野のサブジェクト・リポジトリである「Econometrics Online」(<http://www.nereussec-omics.info/eonline.html>)へも掲載されるようになった。当然のことながらアジ研の研究成果は経済学のみならず地域研究やその他の社会科学分野を含んでいる。ほかの関連分野のサブジェクト・リポジトリがあればそちらへの参加や、他機関との連携も視野に入れていく必要があるだろう。

また、途上国の現地研究機関を含む他機関のIRからアジ研と関連する部分のメタデータをハーベストするようなシステムを構築し、所在情報等をあわせて情報提供するよう道も考えられる。いづれにしろ、この分野は新たな機能の開発や現場での実践、連携などの動きが活発なので、将来的な展開にも大いに期待できるだろう。

●「著者」としての研究者へのサービス

一般にIRとは何かという問いに対し、その出現の経緯である学術雑誌の価格高騰やオープンアクセス運動などから「学術情報流通の新たな形態」と言われたり、名称と機能から「研究機関の知的生産物を一元的に保存／提供するサービス」などの説明がなされることが多い。しかし、先日筆者が国立情報学研究所の研修に参加した際に印象に残ったのは、IRは「著者としての研究者へのサービス」という一面を持つということだった。従来図書館は「読者」としての研究者へサービスを提供してきた。しかし様々な機関の実務担当者との体験談によると、IRの広報やコンテンツの収集過程で研究者に働きかけ密接にやりとりするうちに「著者」としての研究者の活動についての理解が深まり、IR以外の図書館サービス全般に関しても様々なヒントが得られたという。研究者との新たな関係性の構築に寄与し、今後の図書館運営のあり方を考えるうえでIRは大きな可能性を持っているのではないかと感じられた。人員の確保や運営面での課題も多いが、IRの分野は日々進歩しており、様々な方向性で夢を描くことができる。アジ研図書館の歴史のなかでARRIDEの歩みは始まったばかりだが、今後の発展に期待していたきたい。

(さかい かなこ／アジア経済研究所 図書館)